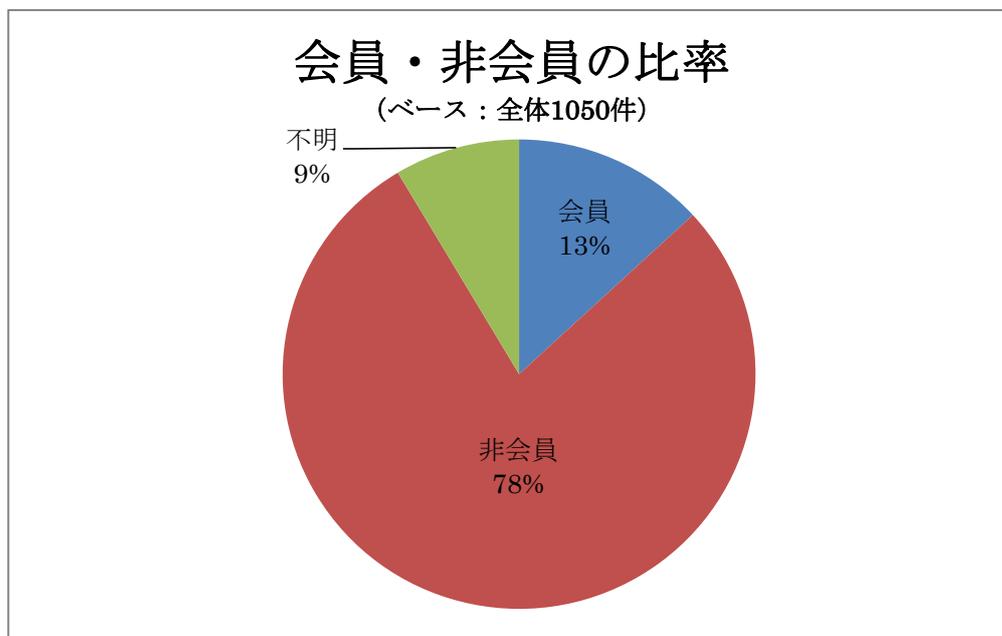
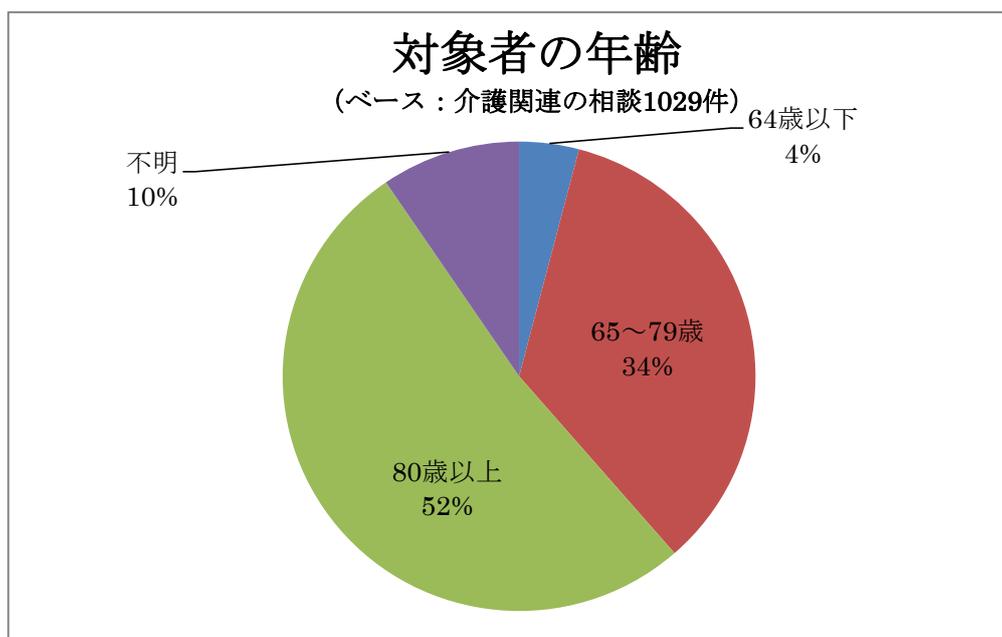


## 「2020年度ちば認知症相談コールセンター集計結果から」

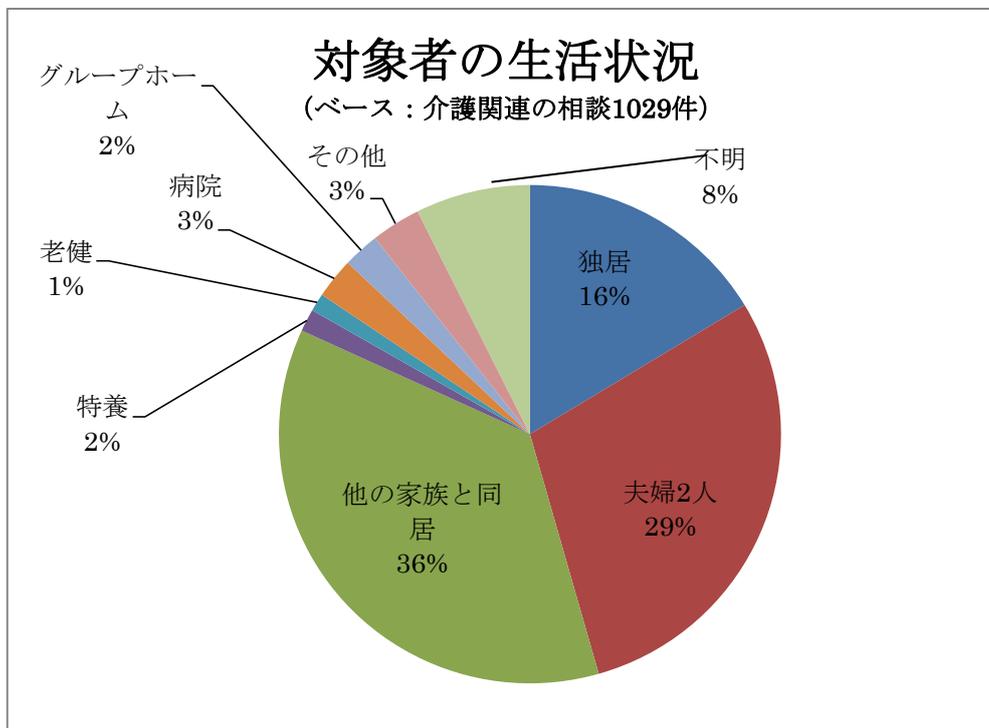
2020年度（2020年4月1日～2021年3月31日）1年間の総相談件数は1050件（うち面接相談10件）だった。



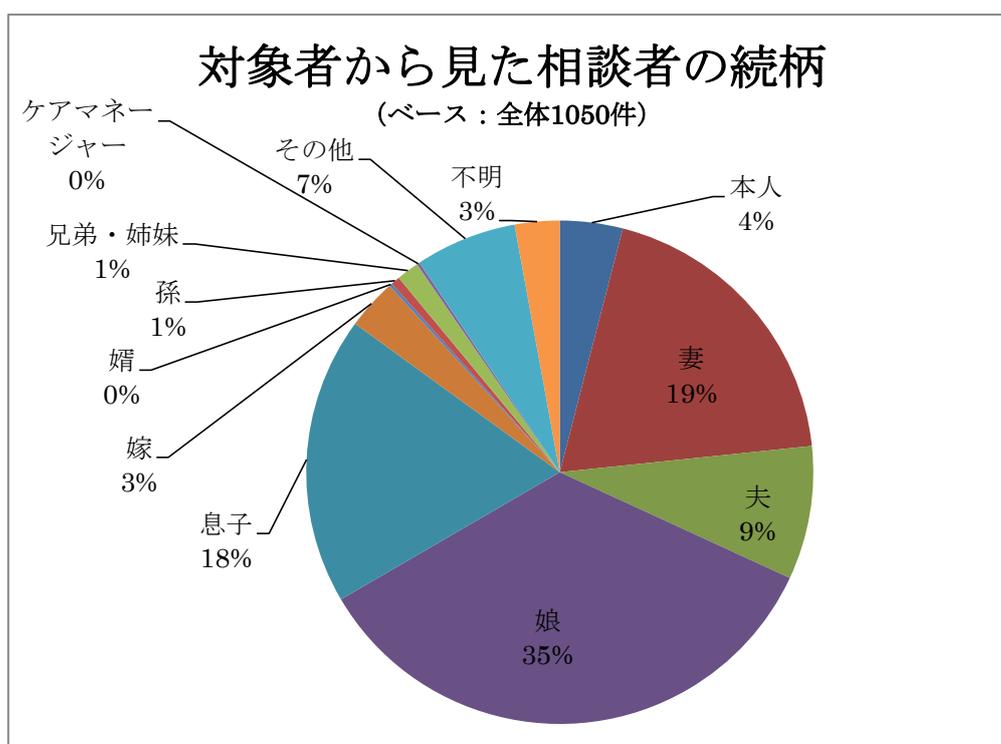
会員からの相談は13%であった。会員以外からの相談が78%と圧倒的に多かった。非会員の相談者はホームページや広報、チラシ・リーフレットなどを見て相談電話をかけてきていることがうかがえる。



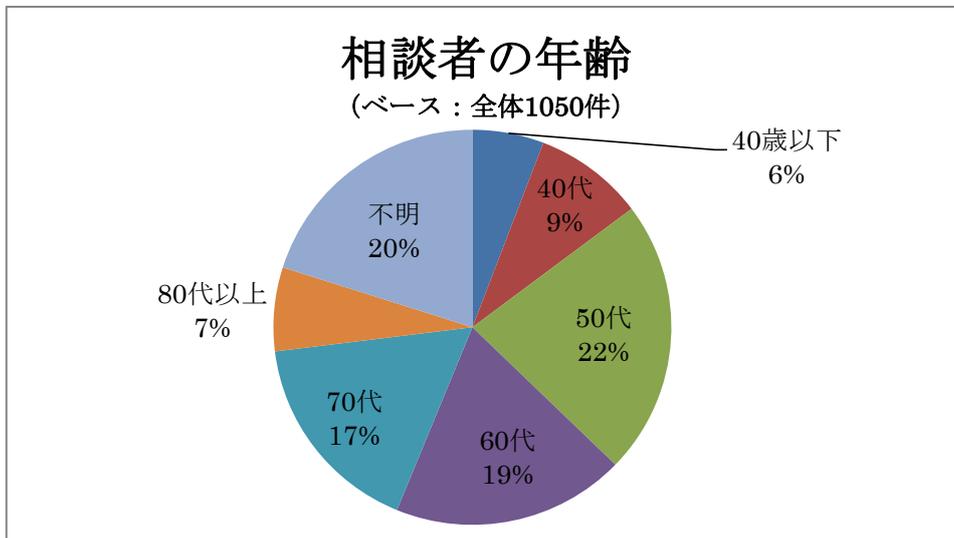
介護対象者の年齢は長寿社会を反映し80歳以上の方が52%と最も多かった。次に65歳から79歳までが34%を占め、合わせると86%の方が高齢者である。しかし若年での対象者も4%あった。



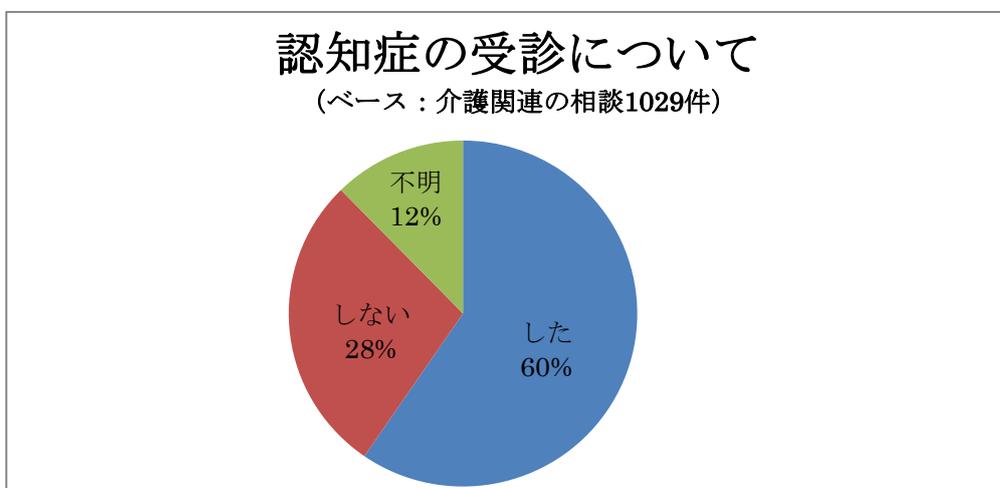
認知症になっても在宅で生活している方が 81%である。その内訳は他の家族と同居が 36%、夫婦 2 人世帯が 29%、独居 16%であった。在宅での介護の苦労がうかがえる。住み慣れた地域で安心して介護生活が送れるように相談してきていることがわかる。安心して暮らし続けるための地域づくりの大切さを感じる。



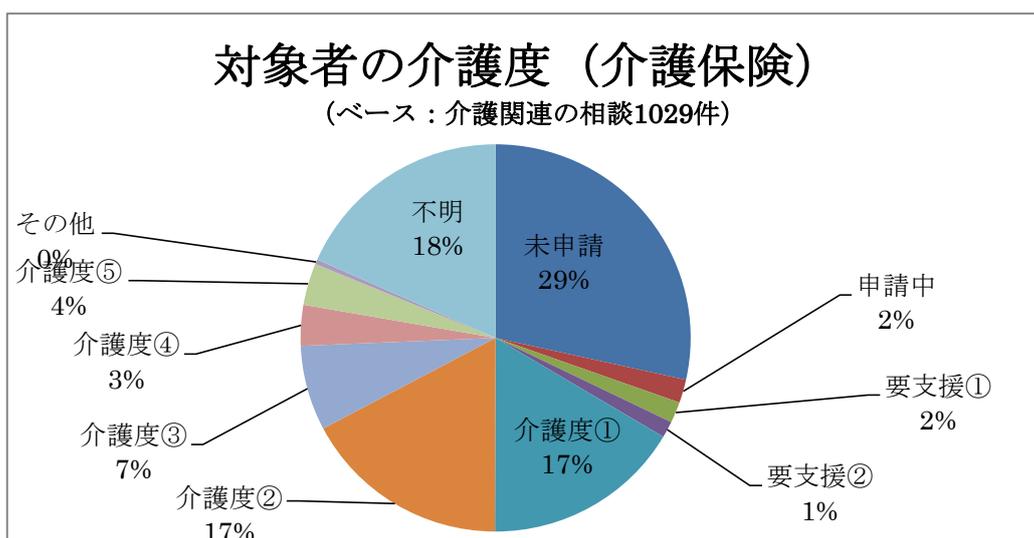
相談者は娘が最も多く 35%だった。息子からの相談も 18%あり、子供からの相談が 53%になっている。認知症の親と別居しているケースも多く、実の親を心配しての相談となっている。昨年度の相談者の続柄と比べてみると嫁からの相談が激減し 7%あったのが 3%になった。妻や夫からの相談は増加している。



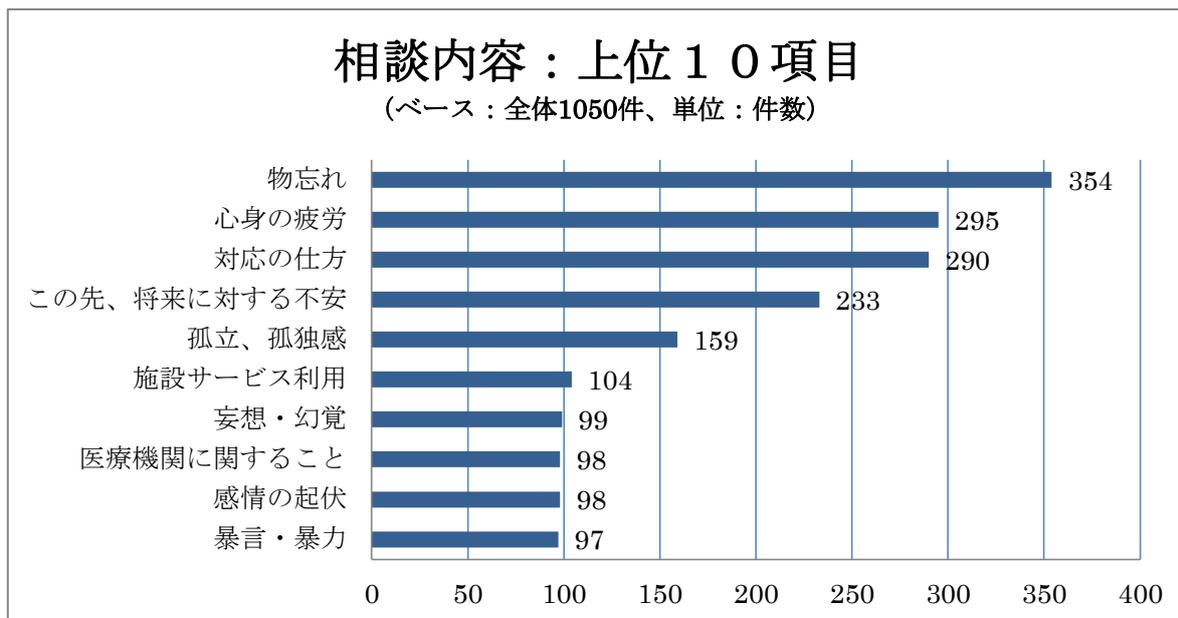
相談者の年齢は50代が一番多く60代、70代と続く。この50代から70代までで全体の58%を占めている。前年度14%と多かった40代からの相談が9%に減少し、逆に60代は前年度12%であったが19%に増加した。また80代以上の相談も7%あった。電話相談は誰でも気軽に相談ができるので、幅広い年代からの相談が寄せられていることが分かる。



相談者の60%が認知症の受診を行っている。受診をして病名が明らかになってから不安はますます増大するものと思われる。具体的な助言や気持ちを聞いてもらえる先として、介護経験者で運営するコールセンターが選ばれているものと思われる。受診する前の相談は28%であった。



介護保険未申請の人からの相談が 29%ある。申請の時期を迷っていたり、認知症の兆候かどうかを確認するための相談が多い。要介護 1～3 の介護者からの相談は 41%であった。切実な相談が寄せられるのもこの時期の介護者からである。



相談内容の上位 4 位までは昨年度と同じであった。昨年度 7 位だった「孤立、孤独感」が 5 位になり、「医療機関に関すること」が 7 位になった。物忘れを心配する相談から始まり、様々な行動の対応に苦慮し、心身の疲労や将来への不安を抱えての相談の流れがうかがえる。それに加えてコロナ禍での介護は、人との繋がりを断ち切るもので、本人や介護者は孤立し孤独を感じるが多かったものと考えられる。

#### 『考察』

今年度の相談件数は昨年度より 296 件増えて 1050 件（内面談 10 件）であった。2010 年度にコールセンターが開設されて以来最高の相談件数だった。ここまで相談件数が伸びたのは新型コロナウイルス感染症対策に起因するものと思われる。

相談者の家庭環境は、高齢社会の進展を反映し本人の年齢 80 歳以上が 52%、65 歳以上を含めると 86%が高齢者の家庭である。独居及び夫婦のみの世帯が 45%もあり、病気を抱えていても一人で生活をし、配偶者がいたとしても、介護をする配偶者も高齢者であり老々介護をせざるを得ない実態がうかがえる。また実子からの相談が 53%（うち娘が 35%）と最も多かったのは、高齢の親を案じての相談が多かったためと思われる。

主たる介護者からの相談が 67%と最も多かった。相談者がすべて主たる介護者ではないが、介護の担い手が多様化してきている様子は分かる。妻や夫、少なくなったが嫁をはじめ、最近では子供たちからの相談が多く寄せられている。その他、兄弟姉妹や婿からの相談もあり、それぞれ家庭の事情により介護への関わり方も違ってきている。認知症本人を抱え将来に対する不安を訴える相談が多いのは事実だが、介護を担っている世代毎に抱えている問題は様々である。それぞれの実情に合ったきめ細かな社会支援が必要とされる所以である。

コロナ禍でつどいや交流会が開催できないなか、電話相談は施設利用や外出を制限された介護者にとって、安全かつ気軽に話せる場として必要度が増したものと思われる。